

怪異と表現法

泉鏡花作

明治四十二年四月

不思議と云ひましても色々ありますが、此處では
靈顯、妖怪、幽霊なぞの類に就いて云ふのでありま
して、是等のものを文學上に表現致します態度に就
て、まあ、お話ししたいと思ひます。

不思議を描く。先づ第一に不思議を描くには不
思議らしく書いては不可ません。斯うやつてお話し
をります中に、疊の中から鬼女の首が出現れたな
ぞと申しましても、あんまり突拍子もなく凄味も
ありません。ですから、幽霊を幽霊とし、妖怪を妖
怪として書いては怖くない、只何となく不思議のも
のが出て来て、物を云つたり何かする方が恐い
です。

其處で幽霊なら幽霊の形を表現するのは未だ容易
ですが、夫に口を利かせるとなると、サア中々難し

なくなつて來ます。何故なら怪異には地方的特色と云ふものがあつて、假令へば牛込の化物を京橋へ持つて行けば、工合が悪くなる様なもんですから、其の時と場所に相當した言葉を使はなければならぬ。是が中々々大變です、昔私の故郷の某所に、一の橋があつて其處へ毎夜貉が化けて出て通行人に時刻を問ひ返事をする、齒を出してニヤリと笑ふ、と云ふ話があります、其時間を問ふ時の言葉は「何時つて長く引張るのです。其引張る調子が如何にも氣味が悪うござんすが、是を若し巢鴨か早稲田邊の橋の袂で、「君今何時です」と訊かれたつて少毫も恐い事はありません。併し此の場合には、

詳入りの意味 「何時ヤー」てんですから、東京人にも意味が判りますけれども、或る地方の言葉なぞになると、全く東京人には判らぬのがある。そんな言葉で幽霊が何と云つたつて、東京人には少許も恐く感ぜられない場合があります。ト云つて「右は何々の意味に候」と註を入れる譯にも行かないから、どうしても仕方ありません、言葉の難かしいと云ふ例には斯んな話もあります。昔の化猫の話に、猫が鴨居を傳はつて行つて、鼠を捕らうとして取落し

たときに「南無三」と云ふ。此「南無三」と云ふ言葉は此場合に一種の凄味があるけれども、若し「しまつた」と云つたら何だか猫が肌脱ぎに向鉢巻でもして居さうで氣が抜けてしまふでせう。

あら怨しや 昔の幽霊は紋切形の様に「あら怨しや」と云ひますけれども、こんな言葉は近代人の耳には凄くもなんともない。さうかと云つて「チテンプイノ、ごよの御寶」とも猶更云へず、譯の判らぬ漢語や、ギリシヤ文字を並べる事も固より出來ず、
まつた 幽霊の言葉位厄介なものはありません。

夫で話は又後へ戻りますが、不思議をかいいて讀者に只の不思議と思はせずに、何となく實らしく、凄く思はせる好い例は講釋師の村井一が本郷の振袖火事の話をして、因縁のある振袖を焼いたら空へ飛上つて、スツクと人の形の様に突立つて、パツと飛散ると共に本堂の棟へ落ちて、それが爲あの大火事になつたと話しましたが、其話をする前に、前提として、自分が曾て下谷の或る町を通ると、突然後方の空中で「チャラノ、」と異様の響がした。不思議に

おも 思つて振返ると、夫は風鈴屋が旋風の爲に荷を巻上
げられて、風鈴が一度に「チャラ／＼」と鳴つたの
でした、と云ふ話をしました。比話をしておいて、
振袖火事の方をやつたから、普通なら振袖が自然に
飛上つて、人の様な形をするのは餘り不思議で信じ
難いのを、此話をきいた爲にそんなに不思議でもな
く なつた。是は實に話を人にきかせる周到な用意で、
別に人を欺く手段ではないのです。一寸した事です
が、此用意を呑込まなければ、中々不思議の事を書
くのは難かしいのです。（話。）